趙陶斎の随筆『息心筆記』翻刻（その一）

坂本弥生・大北智子　（中之島図書館）

はじめに

趙陶斎、名は養、字は仲頤。陶斎、息心居士、枸杞園、清暉園と号した。正徳三年（一七一三）長崎で生まれた。父は来舶清人という。幼くして華僧竺庵の弟子となり二十年ほど僧籍にあった。その後僧籍を離れ、諸国を遊歴し、江戸に十余年、宝暦中頃から大坂に移り、明和七年（一七七〇）堺に移り住んだ。天明六年（一七八六）七四歳、堺で没した。書に優れ、詩、篆刻をもよくした。門人に頼春水・森田士徳・木村蒹葭堂・増山雪斎・十時梅厓などがいる。

趙陶斎の随筆は陶斎が堺に在住した六十七歳の時に執筆した『随問筆記』が初めてと言われる。門人たちに求められるままに書き与えたもので自筆もしくは写本で各地に『陶斎随筆』『息心筆記』等のタイトルで伝来する。唯一出版されたものに、文政九年（一八二六）に門人の村上恒庵が陶斎自筆の箚記数巻から抜粋して摹刻した『陶斎先生随筆』がある。内容は、多岐にわたるが、読書写字のことを重んじ、学問のことにおよんだ文が目立つ。その他、日常の卑近な事例、和漢の書物から例を出し、修養のこと、処世の心がけなど道義的な話も多い。詩文・書画のこと、自らの履歴や身辺雑記なども記す。

当館では開館以来趙陶斎の随筆を収集してきた。『清暉閣談話』（甲和二九五）*『息心筆記』（甲和九八〇・九八一）『随問随筆』（甲和九八二）*『陶斎随筆（仮題）』（甲和九八三）『枸杞園筆記』（甲和一〇一一）*『陶斎筆記（仮題）』（甲和一〇一二）　*『陶斎先生随筆』（甲和一〇六二）『趙陶斎随筆記』（甲和一〇八一）『陶斎随筆』（甲和一二七四）『随問筆記』（〇四一-三八）などの陶斎の随筆を所蔵している。そのうち＊印をつけたものは『大阪府立図書館紀要』第十七号（昭和五六）に翻刻している。此のたび新たに『息心筆記』と題する一本を得る事が出来たので、くずし字の学習を兼て翻刻した。今回は前半部分を翻刻した。

『息心筆記』　巻子本　一巻　紙高十三・五㎝×一二m　濃緑色絹表紙　題簽は『陶斎筆記』、巻頭題は『息心筆記　壬寅十一月廿六日　夜二更起』とある。（甲和一三二〇）

文中「息心今とし七十歳なり。」とあり天明二年執筆と知れる。「息心の居所は泉州堺くしや丁はまにして」とあり枸杞園のことと知れる（現在堺市堺区櫛屋町）。門人の益田睢軒の櫛屋町浜の別宅を提供したもので趙陶斎晩年の居宅である。

この翻刻にあたっては平野翠氏（奈良大学非常勤講師）の御教示を受けた。

凡例

本文は底本を忠実に翻刻することを原則としたが、通読の便を考慮して、句読点・返点・濁点を新たに施した。また原本の「ワ」「ミ」を平仮名に変えた。

漢字の字体は通行の正字体を主とした。

反復記号「ゝ」「ヽ」「ゞ」「く」は底本のまま、漢字のくり返しは「々」で表示した。